

融雪促進に関する営農技術対策

平成17年3月 9日

北海道農政部

1 か 月 予 報 平成17年3月4日札幌管区气象台発表

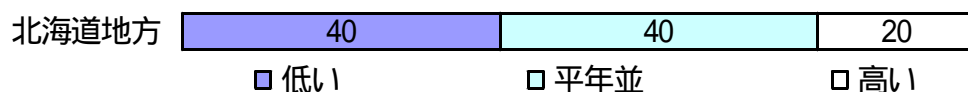
< 予想される向こう1か月の天候 >

天気は数日の周期で変わりますが、寒気の影響を受け日本海側では平年比べて雪の日が多い時期があるでしょう。

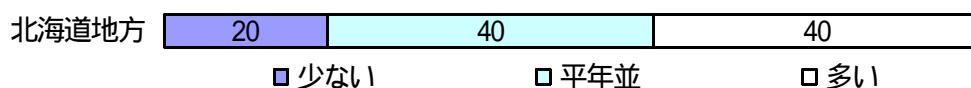
向こう1か月の気温は平年並か低いでしょう。降水量は、日本海側では平年並か多く、太平洋側とオホーツク海側では平年並でしょう。日照時間は、日本海側では平年並か少なく、太平洋側とオホーツク海側では平年並でしょう。

週毎の気温は、1週目は平年並、2週目は平年並か低く、3～4週目は平年並でしょう。

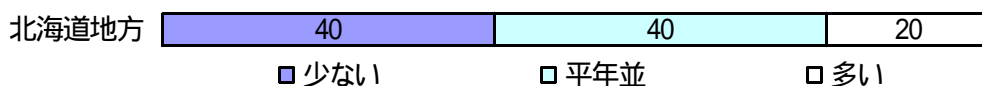
< 気温 >



< 降水量 >



< 日照時間 >



平成17年3月4日に札幌管区气象台が発表した1か月予報は上記のとおりです。

今後も気象情報に注意しながら次の事項を重点に営農指導の徹底に努めてください。

今冬（12月～2月）の気温は、初冬に暖かった影響もあり、冬平均では平年偏差が+0.1 で平年並であったが、降雪量は、一部の地域を除き全道的に多く、3月6日現在の積雪は、函館で52cm（平年18cm）、帯広で62cm（平年28cm）、網走63cm（平年38cm）倶知安211cm（平年160cm）であり、昨年続き2年連続で多くなっている。要因としては、太平洋側については12月上旬から中旬及び2月中旬から下旬に発達した低気圧が北海道を通過したこと、日本海側やオホーツク海側では、1月下旬から2月中旬に冬型の気圧配置となった影響で、強い寒気が流れ込む日が多かったことが考えられる。

3月4日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並か低いと予想されており、全道的に融雪は、平年よりかなり遅くなることが予想される。

気象情報に留意し、以下の対策を参考に春期の作業が遅れないよう融雪促進に努めましょう。

第1 融雪の促進（共通事項）

1 融雪材の散布時期

本年は、ほぼ全道的に積雪量が多く、融雪の遅れが懸念される。このため、育苗や耕起作業の遅れや、雪腐病などによる作物被害が発生しないよう、融雪材散布による融雪促進をすすめる。融雪材散布時期の目安は、日平均気温が-3 以上になる頃であり、この気温になると日中はプラスの気温となり雪解けが進む。（平成13年指導参考事項「北海道の1kmメッシュの根雪情報と表示システム」参照）

表1 3月6日現在の主な気象官署の積雪と平年値

地点	最深積雪 (H17)	最深積雪 (平年値)	根雪終日 (平年)
札幌	107	69	4月3日
旭川	74	74	4月8日
留萌	88	72	4月5日
岩見沢	111	89	4月6日
小樽	140	92	平年値なし
倶知安	211	160	4月18日
網走	63	38	4月4日
帯広	62	28	3月19日
苫小牧	34	6	3月8日
函館	52	18	3月14日

2 融雪材の散布量と回数

水田にはケイ酸資材を、畑には融雪防散炭カルやアッシュを散布する。散布量は資材の種類により異なるので注意して散布する。

融雪材を散布した後に降雪がなければ1回の散布で十分である。しかし、融雪材散布後に10cm以上の降雪がある場合は、効果が小さくなるので再散布が必要になる。特に散布時期を早める場合は、降雪に遭う確率も高まるので、2回散布に対応できるように資材の確保に努める。

表2 融雪材の散布効果（平成15年上川農試調査）

	消雪日	融雪促進日数	消雪所要日数	日平均減雪深
無散布	4月11日	-	30日	2.3cm/日
散布区	3月27日	15日	15日	4.7cm/日

融雪材：防散融雪炭カル、100kg/10a、3月12日散布

3 融雪水の排除

融雪水がほ場に停滞することがあるので、排水溝が十分に機能するように整備し、融雪水を速やかに排除できるようにする。

第2 水 稲

健苗育成には床土の十分な乾燥と適期播種が重要である。そのためには、育苗ハウス設置場所の除排雪を行い、3月の内にビニール張りを完了する必要がある。融雪材を使う場合は、水稻苗代専用融雪材か床土と同じ土壌を散布する。また、育苗ハウス周囲に簡易明きょや排水溝を掘り融雪水の排除に努める。

育苗ハウスの完成後は、日中は時々換気を行うなどハウス床土の早期乾燥に努める。床土の酸度矯正が必要な場合は、JAや普及センターで診断を受け早めに改善を行う。

第3 畑作物

融雪材の使用により、融雪水がほ場に停滞し、秋まき小麦の生育が停滞するほか枯死しやすくなるため、排水溝が十分に機能するように整備し、融雪による停滞水を速やかに排水できるように溝切りを行う。

第4 露地野菜

- 1 スイートコーン、だいこん、にんじんなどの早出し栽培を予定している畑では、融雪の遅れにより播種作業が遅れたり、低地温による発芽の遅れや抽だい（だいこん）の恐れがある。また短根や「ひげ根」の多発、形状の悪化等（だいこん、にんじん）も懸念されるので融雪促進と排水に努め、地温上昇を促す。
- 2 早期は種たまねぎやキャベツなどの定植を予定している畑でも、融雪の遅れによる定植作業の遅れ、老化苗定植による活着不良や初期生育不良、タネバエの被害等の恐れがあるので融雪促進に努める。
- 3 露地アスパラガス畑では融雪の遅れにより、萌芽が遅れて、収穫期間が短縮され低収となる恐れがあるので融雪促進につとめる。

第5 施設野菜

1 ハウス周辺の融雪促進

トマト、きゅうり等のハウス半促成栽培においては、融雪の遅れでハウスの定植準備が進まない恐れがある。ハウス内と周辺に融雪促進剤を散布し、できるだけ早く除雪機が入れるように融雪促進に努める。

2 育苗管理（定植の遅れに対する対策）

一方、定植の遅れに備えて苗が老化しないよう、育苗管理にあたっては次の点に留意する。

- (1) 温度管理は適温の範囲内で低めとする（極端な低温管理はトマトでチャック・窓開き果が多発するなど苗質の低下を招く。そのためあくまでも適温内で管理する）。
- (2) 灌水も控えめとするが、極端に萎れさせないようにする。
- (3) 鉢の間隔を広げて苗が徒長しないようにする。
- (4) 定植が遅れて肥料切れを起こしそうな場合には、液肥等で追肥を行う。

第6 果樹

1 融雪促進と融雪水の停滞防止

融雪促進とともに雪質をザラメ化することで枝折れを防止するため、融雪剤を散布する。また、融雪水が停滞する場所は簡易な溝切りを行い早期排除に努める。

2 雪害対策

- (1) 施設の破損を防ぐため、雨どいの雪下ろしやぶどう棚外周の架線を引き上げたり、架線上の除雪を励行する。
- (2) 枝折れを防ぐため、雪に埋まった枝は沈下しないうちに可能な限り掘り起こす。なお、掘り起こす時は、細かい枝を折らないように十分注意する。
また、雪が固まり掘り起こしが困難な場合、スコップで雪に切れ目をいれたり、樹冠下の雪踏みを励行する。
- (3) 主幹や主枝のつけねからの折損が懸念される場合、早めに切り取る。主枝や側枝に枝おれが発生した場合、切り直しをして癒合剤を塗布する。

3 整枝せん定の留意点とヤソ(野鼠)対策

- (1) 積雪が多いことから、せん定作業が遅れないように、春先の作業から逆算して計画的に進める。せん定に当たっては、上部をやや多めに枝を残し、下枝の状況で手直しを考えたり、鋸による粗切りで作業時間を調節するなど工夫する。
- (2) ヤソ害が懸念されるので、雪踏みや殺鼠剤の散布で樹体を保護する。

第7 酪農・畜産

1 畜舎・施設及び家畜の衛生対策

農場内の排雪場の排水路を確保し、畜舎、パドック及びサイロへの融雪水等の浸水を防止する。畜舎等へ融雪水等の浸水が予想される場合は、入口に土のうを積むか排水路を確保する等の予防策を講じる。融雪水等が浸水した場合は、速やかに排水し、畜舎内部を水洗消毒する。

また、農場防疫のために、畜舎入口に消毒槽を設置し、牛舎の壁や天井は石灰を塗布する。

農場内の作業通路は排水に留意し、泥濘化、水たまりをなくす。

2 ふん尿貯留施設及び周辺的环境対策

融雪水がふん尿貯留施設に流れ込むことが予想される場合は、土のうを積むか排水路を確保するとともに、ふん尿貯留施設からの「れき汁」が外部に流出する危険がある場合は、側溝と貯留槽を設ける。

3 ほ場滞水と冬枯れ対策

低地、くぼ地のある草地では、アイスシートや停滞水による冬枯れが発生しやすいので、融雪後停滞水が見られたら、プラウによる溝切りなどを行い排水に努める。

また、冬枯れが発生したほ場は次の対応をおこなう。

- (1) 被害程度が比較的軽い草地では、通常の施肥管理を行い経過を観察する。草勢の回復が不十分な場合は、1番草刈り後の草地更新を検討する。
- (2) 被害程度が著しい草地では、パスタードリルによる簡易追播、ロータリーハローによる簡易更新もしくは完全更新について検討する。

4 環境に配慮したふん尿施用の留意点

草地からの養分流出は融雪期に多い（年間養分流出量の6～9割を融雪期が占める）。したがって、融雪期の養分流失防止対策は重要であり、環境面からの効果も高い（平成15年度普及推進事項）ことから、ふん尿散布は融雪後の春重点施用が望ましい。また、チモシーの減収を避けるため、5月中旬までに以下の点に留意して実施する（平成15年度普及推進事項）。

- (1) 河川及び河川に通じる排水路近くにふん尿を施用したり野積みしない。
- (2) 地形や河川に通じる水の流れに留意し、河川への流入防止に努める。
- (3) チモシー草地にたい肥、スラリーを施用する場合、減肥を基本とする。その場合の化学肥料の減肥量は 早春2/3、1番草刈り取り後1/3とする。
- (4) スラリーの肥料養分含量は比重を測定して乾物含量を求めることにより推定できる（平成15年度普及推進事項）ので、それを踏まえて施肥対応する。

5 放牧準備

早春放牧草地は、早期放牧開始に備え融雪促進とともに、牧柵・牧道・給水施設等の点検・整備等を早め実施する。また、放牧予定牛の放牧草への馴致を行い、飼料や環境の急変にもなうストレスの軽減に努める。

第8 大雪等に対する対応

予期しない降雪等があった場合は、「大雪に関する営農技術対策」（平成16年2月23日発表 <http://www.agri.pref.hokkaido.jp/center/sakkyo/03gijyutu/15-y2.html>）に準じて適切な対応に努めること。